

2024 竹フォーラム：竹林の特殊な営みの道を探そうー官民連携の可能性とチャンス

林玲安（国立成功大学メサ協同 USR 計画/プロジェクトマネージャー）

蔡佩澐（国立成功大学都市計画学科/兼任アシスタント）

メサ協同チームは長期的に西南浅山の蓬莱竹産業の発展に注意を向けており、数多の授業でメサの蓬莱竹産業を議題として討論をしていました。最近、生徒たちは「持続可能な都市と地域マーケティング実習」の授業では、インタビュー、フィールドワーク、ワークショップや内部の使用情報を収集及び分析を通じて、地方が竹林の干ばつによる火災に直面していること、国有林に蓬莱竹が分布しているが有効的な管理をされていないこと、そして蓬莱竹の老朽化によって土壌や水質保全機能が低下し、崩壊しやすくなることなどが発見されました。これらの問題は、現地の竹産業衰退のジレンマのみならず、竹林の経営管理における異なる部門と違う領域に跨る新たな思考回路と実践性が必要となります。そのため、今年九月で当チームは「2024 竹フォーラム：竹林の特殊な営みの道ー官民連携の可能性とチャンス」を開催し、南部における竹林の経営管理の斬新的な思考回路と実践方法を討論し、更に産官学の代表者を招き、官民連携の経験をシェアしてもらい、今以上に ESG など持続可能な課題に対する応用対策を詳しく勉強しました。此度のイベントを通じて、多方的な理解と交流を促せることで、竹林の経営管理に対する心掛けと発展を促進し、更に官民連携の可能性とチャンスを探ればいいのかと期待していました。



▲イベントの集合写真

竹産業のトランスフォーメーション及び大学の社会的責任実践に関する共同研究

現在、伝統的な竹産業は数多な困難に直面していると同時に、トランスフォーメーションの可能性を備えています。伝統的な竹産業は持続可能な発展が低下している中、天然的な炭素吸収源という新たな需要に対してどのように考え、対応するのか、更に付加価値の高いバイオ炭の応用において、日本の亀岡が作り出した国際的な事例から学ぶ価値があります。

桃園市の台湾真竹産業復興発展協会の理事長である櫓祝様は、彼女が改めて部族に戻って竹林文化を知り、台湾真竹を復興及び広めた過程をシェアしました。科学技術の進歩と竹産業の需要が変化するにつれ、彼らが知能と技術を向上させ、竹林を鑑みるためにドローンや3Dモデリングなどの新技術を習得しました。更に会社のあらゆる制度を調整し、持続可能な事項に関する規定に合わせ、永続的な潮流に備えました。しかし現状では人手が減らし、高額な機械と運輸コストが最も重い負担となり、そのため同じく竹の持続的な管理を重んじている企業と提携したいと考え、もっと多元的な経営方法を期待していました。



▲台湾真竹産業復興發展協會理事長である櫓祝様のシェア

林業試験場から引退した研究員である林裕仁さんは、今年農業部門が提起した「竹林の二酸化炭素吸収源方法学」を紹介し、気象変動という課題に直面し、炭素クレジットの自主的な削減のため、竹林経営の重要性について言及しました。台湾の竹資源は豊富で成長が早いため、その炭素固定能力はかなり秀でています。竹林プロジェクトの炭素クレジットの削減量が計算及び報告できるように、適用条件と土地の合格性などの構成的要素をターゲットに減量方法を定め、企業と竹林を融合させた持続的発展を促進します。

国立中央大学のプロジェクトアシスタントである鄧家洋は日本の亀岡市に視察した際に見た付加価値の高いバイオ炭の応用方法をシェアしました。特に農業資源の付加価値応用を促進するための設備使用、竹材の応用と法律制度の三方面からは台湾が学ぶ価値があります。そして中央大学が行っている USR 計画は竹産業の中で、政策の宣伝と教育活動の促進者となり、国家政策、地方とのコミュニケーション、そして教育学習の架け橋となります。

ポジティブな自然成長に向けた官民セクターの対応と実践に関する企業 ESG

前の話題に続いて、竹産業がトランスフォーメーションを果たしたければ官民連携が必要となります。フォーラムの第二部では、第一線で活躍する企業 ESG のスタッフと農業部林業と自然保育署嘉義支店を招き、企業が ESG

の実務作業における戦略的評価と公的機関が進めている ESG マatchingプラットフォーム政策について紹介しました。

企業の永續部門にて永續専門員を担当しているイヴァンは ESG、CSR、SDGs などの重要なキーワードについて紹介し、企業環境の中でこれらのキーワードは出発点(CSR)、過程評価(ESG)、最終目標(SDGs)を代表することをはっきりとさせました。更に環境、社会、会社管理における様々な事例を紹介しました。例えば信義不動産と彰化の花樹銀行が提携して緑色の生態基地を建て、絶滅危惧種を保護し、スタッフさんが環境保護に参加できるように促しました；ファミリーマートが実行している「移民労働者フレンドリーサービス計画」は、性別と心身障害者のインクルージョンを促進させました；企業の上級管理職は持続可能な発展を考慮する必要があり、上級管理職の報酬は持続可能な業績と連動させるべきです。中小企業も大型上市企業も、持続可能な発展を促進することは競争力を強める鍵となります。そのためコミュニティの地方組織や政府機関は如何に持続可能な発展においてお互いを支え合って提携するのもかも、企業が重視する方向性となっています。

農業部林業と自然保護署の嘉義支局の張雯婷技書記は、ネットゼロ政策と生物多様性の保全策を組み合わせ、企業に自然炭素吸収源プロジェクトへの参加を促すため、嘉義分局が現在構築している ESG Matching・プラットフォームを紹介しています。現在スタートを切っている七つのプロジェクトの中で、三企業が既に自然炭素吸収源プロジェクトへの参加を申し込みました。例えば台湾セミを保護するための大埔事業エリア竹再生計画は、SDGs 目標に相応しく、更に ESG 証明を獲得していました。そして竹は炭素削減と資源再利用が可能なグリーン材料として、関連政策を通じて台湾竹のブランド知名度を向上させ、新たな価値を想像し、更に環境保護と生態維持を促進し、人と自然環境の調和的共存を実現することが期待されています。



▲農業部林業と自然保護署の嘉義支局の張雯婷技書記は構築している ESG マッチング・プラットフォームを紹介しています。

総合座談

最後の総合座談では、座談参加者は企業提携と ESG プロジェクトを促進させる政策とチャレンジについて討論を進めました。櫓祝理事長は、現在の ESG マッチングプラットフォーム政策は企業の対応において様々なチャレンジが残されており、竹産業が人手不足の問題に直面するにつれ、より多くの資源発展が導かれるよう、更に廃棄物処理と就職安全面における議題をより理解できるように企業と政府機関の提携が望まれています。鄧家洋さんは、企業と提携し ESG プロジェクトを進めた際に、全員が模索段階にあるため、如何に現在の枠組みからより多くの可能性を探し出すのかは今における挑戦と未来につながるポテンシャルにもなり得るとシェアしてくれました。林裕仁博士は、公的機関が炭素クレジット計算の学術的根拠に取り組んでいる際は、大学の学術研究部門の関与が必要だと述べていました。イヴァンは、企業が自然プロジェクトを促進する際に、企業とご当地の地域的連携性が企業を強化し、国際的議題に応じ、持続可能な枠組に当てはまるか考慮すべきだと述べていました。違う規模の企業はコミュニティ提携に対しても違う期待を持っているため、双方が理解できる言葉でコミュニケーションを取ることが重要になります。最後、林保署嘉義支局の鄭鈞騰書記は、今年で初めて

ESG マッチング計画が開始されたこと、これまでマッチングに成功した企業は多くないが、今後は生物多様性に関する環境教育イベントなど、官民連携を強化するためにマッチングのチャンスを増やしていくことを指摘しました。また、産・官・学・研・社の共有と会話を通じて、当フォーラムは現代の竹林管理における新たな可能性とチャンスを探っていました。



▲ 関与者は総合座談の中で質問に対して回答とシェアしました

バンブーフォーラムにおける味覚体験

今回の竹フォーラムは、龍崎コミュニティのお菓子作りワークショップ「言心手作」に特注して、二種類の現地食材入りのお菓子を特製してもらいました。「干し筍の鹹味ケーキ」は新鮮な青ネギ、揚げネギ(油蔥酥)、卵に龍崎職人が特製した干し筍の漬物を加え、レトロ調の鹹味ケーキにしょっぱくて香ばしく、サクサクとした味わいを感じさせました。もう一種類のお菓子は「酸っぱい筍入り胡桃シナモンロール」は厳選された輸入小麦粉、クルミ、黒糖、シナモンなどをシナモンロールに作り、龍崎現地の筍とクリームチーズを合わせて酸っぱい筍ソースを作りました。その味は独特で控えめの甘さを持っています。盛り付けにも百竹園、慕竹閣などの現地組織が提供した竹バスケットと竹のかごなどの容器を使用し、更に参加者には再生可能な食器を提供し、ゴミ削減の目的を果たしました。地元の食材を使った料理、竹の芸術品を用いた盛り付け、更に再生可能な食器など、竹フォーラムを開

催することで、天然的な竹を使った持続可能な生活に貢献したい考えていました。



▲龍崎の現地食材を利用した干し筍の鹹味ケーキ、酸っぱい筍入り胡桃シナモンロール